

オリンピック反対論者の主張にも理はあるが、今日の快晴の開会式を見て、私の感じた率直なところは、「やつぱりこれをやつてよかつた。これをやらなかつたら日本人は病気になる」といふことだつた。

(「東洋と西洋を結ぶ火——開会式」)

前回の東京オリンピックの際に、三島由紀夫はこう書いた。今回私たちは、コロナ新規感染者が急増する状況下ではオリンピックなど中止すべきだという立場と、いや、開催はすでに決められたことで、他のことを犠牲にしても遂行すべきだという二つの立場の間の亀裂を、ついに埋めることができなかつた。オリンピックの閉会を迎えた今に至っても、亀裂は亀裂のまま残り、それどころか一段と深まっている。

本書『三島由紀夫小百科』は、当初の予定では二〇二〇年のオリンピック開催前の刊行を目指していたのだが、編集作業が思うように進まず、刊行が一年以上遅れ、関係の皆様にも多大なるご迷惑をおかけすることになってしまった。編者としてその責任を痛感している。ただ、結果的に一つ言えるのは、この未曾有の事態のなかでの本作りによって明らかになったことがある、ということだ。パンデミック下のオリンピックについて、誰もが「や

つぱりこれをやつてよかつた」と言える日は、いつか来るのだらうか。そんな日は決して来ないし、また来るべきではないのか。それとも、こういう問いを立てること自体が無意味、無神経、害悪なのか。オリンピックが終れば何もかも忘れてしまうのか。——これは、一段深く考えると、「共同体」と「危機」と「物語」との関係を私たちはどう考えるべきかという問いに他ならないが、こう自らに問うとき、私たちはこれこそが三島が追究しようとした問題ではなかったか、と気づくのである。さらに言えば、この問いが今後数十年のうちに（いや、もっと早いかもしれない）、より差し迫った形で私たちに突き付けられるに違いないと、三島は見抜いていたのではあるまいか。

本書に収められた原稿は、必ずしもこういう事態を具体的に念頭に置いて書かれたものではない。だが、いずれもその射程は広く、二一世紀を生きる私たちを襲う光景が、すでに三島の目に映っていたのではないかと感じさせるものばかりである。本書の構成に即して、その内容を簡単に紹介しておきたい。

Ⅰ 略伝……三島由紀夫の生涯と文学を概観するものだが、従来の三島評伝に比べ、文学と社会、歴史との間に力点を置いた。他所ではあまり目にするのではない関連図版も掲出したので、個々の事項を具体的にイメー
ジしやすいと思う。

Ⅱ 主要作品事典……「花ざかりの森」、「仮面の告白」、「禁色」、「潮騒」、「金閣寺」、「鏡子の家」、「宴のあと」、「愛国」（映画版「憂国」も）、「美しい星」、「午後の曳航」、「豊饒の海」について初出、初刊等の書誌情報、梗概、成立事情、研究史、展望などをまとめたほか、「近代能楽集」（「邯鄲」、「綾の鼓」、「卒塔婆小町」、「葵上」、「班女」）、「道成寺」、「熊野」、「弱法師」、「源氏供養」、「三島歌舞伎」として「地獄変」、「鱒壳恋曳網」、「熊野」、「芙蓉露大内実記」、「むすめこのみ帯取池」、「椿説弓張月」、また「鹿鳴館」、「黒蜥蜴」、「サド侯爵夫人」、「朱雀家の滅亡」、「わが友ヒットラー」について、初演、再演の情報なども記した。

Ⅲ 研究史・受容史……国内における三島研究史を概観したうえで、英語圏、ドイツ、フランス、中国、韓国における研究状況を整理、紹介した。誰よりも早く国境を越えて三島文学を学術的に扱ひ、現在も世界における日本文学研究をリードするイルメラ・日地谷キルシユネライト氏から原著解説の文章を直接ご寄稿いただけたのは望外の喜びであった。なお、三島没後五〇年にあたる二〇二〇年は、多くのシンポジウム、イベントが企画

されていたが、コロナの関係で中止になったものが多い。一部、オンラインで実施されたものもあるが、詳細は第IV部の山中剛史「三島没後五〇年——二〇二〇年・二〇二二年上半年回顧」を参照されたい。

IV 三島論の新潮流……ここには一七篇の論考を収めたが、次の一篇を除いて、すべて本書のための書き下ろしである。その一篇は、J・キース・ヴァインセント氏の『仮面の告白』における死産するゲイ・アイデンティティ（奥畑豊訳）で、これはTwo-Timing Modernity: Homosocial Narrative in Modern Japanese Fiction (Harvard University Asia Center, 2012) の最終章（第七章）“The Still Birth of Gay Identity in Mishima Yukio's Confessions of a Mask”の全訳である。およそ一〇年前に書かれたものであるにもかかわらず、その内容は少しも古びていない。

この論考を含め本パートの全体は、おおむね文学上の事跡や事実関係から立論した論考、作品論・作品研究的な論考、理論・思想的な背景を持つ論考の順に配列した。とはいえ、実際にはいずれの論もその論点は多岐にわたり、この構成はあくまでも一つの目安に過ぎない。

先述のように二〇二〇年には多くの関連企画が立てられたが、実現できなかったものが多い。そうしたなか、無観客ではあったが、二〇二〇年一月にウィーン国立歌劇場でオペラ『裏切られた海』（『午後の曳航』）が上演されたのは大きな収穫であった。本書の刊行は予定より遅れたが、そのために縄田雄二氏のご論考でこのオペラに言及していただけたのは有難いことだった。その他最新の研究文献、企画等の情報については、本パート最後の一篇（先述の山中の章）にまとめた。

主要文献目録……主要研究文献を、単行本・事典・論集（一〇〇項目）、図録類（五項目）、叢書類（一〇項目）に分けて掲げた。本書収録の各論考でこれらの文献が参照される場合は、その文献番号を付記した。

本書はもともと、二〇一五年十一月、三島生誕九〇年・没後四五年を記念する「国際三島由紀夫シンポジウム2015」が開催された際に、シンポジウムの実行委員と同じメンバーによって企画された。三島由紀夫の研究事典としては『三島由紀夫事典』（明治書院、一九七六年一月）、『三島由紀夫事典』（勉誠出版、二〇〇〇年一月）がある。前者は三島没後五年、後者は没後三〇年の時期にまとめられたもので、勉誠版事典は『決定版三島由紀夫全集』（新潮社、二〇〇〇年十一月〜二〇〇六年四月）の編集作業の際に主要参考文献の一つとなった。今回の『三島由紀夫小百科』では、その『決定版三島由紀夫全集』の完結後の国内外の研究状況を踏まえたうえで

で、新たなビジョンを提示して、これからの三島研究の展開に少しでも資するものとなることが目指されている。その結果、本書が統一的な三島像を提出しているかと言えば、そうではない。たとえば、さきほどのキース・ヴァンセント『「仮面の告白」における死産するゲイ・アイデンティティ』の論旨は必ずしも三島に対して肯定的とは言えないが、それも含めて、総合的に三島を論じることが重要なのだと思う。

それは、亀裂を亀裂のまま残すこととは違う。オリンピックに話を戻すなら、肯定派と否定派がそれぞれの立場を主張するだけでは、そこから先に話が進まない。パンデミックの状況下でオリンピックをやるのは無謀であり誤りであろう。しかし、それでもやる意義のある行為——それは愚行と見えるに違いない——というものがあろう。そうだとすれば、肯定否定という相異なる立場をつなぐ「物語」を作ろうとする努力を続けなければならぬ。私たちは、今回その営みに失敗したが、対立する者同士が対立しつつも共存することを意義づける「物語」、そういうものが必要なのではないだろうか。

三島は「文化防衛論」に対する橋川文三の批判にこたえて、こう言っている。「政治家や官僚は、一見天皇主義者を装へば装ふほど、言論統制の上に立つた国家権力機構の再建をしか夢みることはない」。だが、反対に、「言論の自由が惹起してある無秩序を、むしろ天皇の本質として逆規定し」、「言論の自由の至りつく文化的無秩序と、美的テロリズムの内包するアナキズムとの接点を、天皇において見いださう」というのが、自分の考えである。これはすなわち、対立する者同士が対立しつつも共存することを意義づける「物語」の一つではないだろうか。ここに「天皇」という名を与えることには異論があるだろう。ならば、どう名付けるべきか、もし名付けなくても「共同体」は存続しうるのか。そこを突き詰めて考えたいと思う。

ちなみに言えば、前回の東京オリンピックの際、私たちはそういう「物語」をわが手にしたのである。閉会式を見た三島はこう書いた。

世界中の人間がかうして手をつなぎ、輪踊りを踊つてゐる感動。冗談いつばいの、若者ばかりの国際連合——。これをいかにもホストらしく、最後から整然と行進してくる日本選手団が静かにながめてゐるのもよかつた。お客たちに思ふ存分たのしんでもらつたパーティーの、そのホストの満足は八万の観客の一人一人にも伝はつたのである。

（「別れもたのし」の祭典——閉会式）

これを読むと、今回のオリンピックとは異なり、三島を含む「八万の観客」がそこに立ち会ったのであり、その目には確かに「物語」が実在したのだな、と思えてくる。しかし、「世界中の人間」を眺めている、「日本選手団」、さらにその「選手団」を眺めている、三島をはじめ「観客」たちの存在が、いかにグロテスクなものでありうるかということ暴露された。三島は忘れなかった。まさにその頃に執筆され、『文藝春秋』（一九六五年一月）に発表された「月澹狂綺譚」という短編小説がある。それは、ある老人が語る四〇年前の話なのだが、それによると、老人はかつて、月澹狂を所有する大沢侯爵の嫡男・照茂に命じられて村娘の君江を犯したのだった。老人はこう語る。

殿様はあの済んだお目で、体をかがめて、必死に抗ふ君江の顔へできるだけ顔を近づけて眺めておいででした。君江もさういふ殿様に気づいてゐたと思ひますが、私はあばれる娘の両腕をしつかり押へてゐましたから、多少とも殿様に危害を加へるやうなことはなく、つまり、いつものごとく、殿様は安全な場所から、しかも安全で一等近い場所から、娘の顔をじつと見つめておられたのであります。

その後、照茂は君江に惨殺され両眼をえぐり取られる。

なぜ三島はオリンピックの直後に、こんな作品を発表したのだろう。選手団を眺める三島と照茂とは、何が違うのだろうか。もし今、私たちが、このまま何もせずにいるなら、私たちの運命は照茂のそれと同じかもしれないと思わないわけにはゆかないのである。

そう挑発する三島は、しかもつ面の文学者でも生真面目な文化人でもなかった。そんな三島の魅力を表現した人形作家・写真家の石塚公昭氏の作品をカバーにご提供いただいた。ここに感謝の意を表したい。

二〇二二年八月八日、東京オリンピック閉会式の日

編者を代表して 井上隆史